

学校名	福島市立三河台小学校	校長名	佐久間裕晴		
住 所	福島市三河南町17-7	児童数	430人	学級数	18
TEL	024-534-0161				

**知・徳・体のバランスのとれた教育の推進**  
**～つなぐ教育による少人数教育の改善・充実～**

## 1 少人数指導の計画等

本県が推進する少人数教育により、本校では1学級22～27人の少人数学級が実現している。この恵まれた学習環境を活用し、「つなぐ教育」をキーワードとした知・徳・体のバランスのとれた教育活動を推進している。

## 2 学力向上にかかわる本校の取組

### (1) 学力に関する課題の共有で教員の意識をつなぐ

学力向上委員会および全教員による協議会にて、本校の学力に関する課題を協議し、直接指導に関わる教員自身の指導の在り方などの改善意識を高め、取り組むべき策を共有することにより、早期診断と早期治療の徹底を図るようにしている。

- 結果を多面的に分析 ⇨ 学年・学級の課題把握・改善の方法検討、  
 特別に支援を要する児童への個別指導の徹底

#### 『教員で共有する主な課題』

- ・学習内容からの課題 → 国語・・・読むこと（読む能力）算数・・・量と測定、割合など
- ・教員の指導力の課題 → 学級により学力にかなりの差 教員個々の自己の課題を意識した指導力の改善と個別指導の取組 アンダーアチーバー児童の削減目標など
- ・学力調査からの課題 → 生活と日々の学習の関連 将来への役立ち感 自己肯定感等の改善

### (2) 学力の課題を教育課程へつなぐ

指導力向上は、日々の授業の積み重ねであるという認識のもと、個々の課題、また、学校・学年共通で実施する内容を年度当初に確認して取り組んでいる。課題解決に向けた取組は次のとおりである。

- ◇ 全ての教科指導に言語活動を位置付ける。
- ◇ 今年度より週2日の読書の時間を設定する。図書ボランティア（保護者）の配置による図書館の活用を積極的に図る。
- ◇ 教育課程への「定着確認シート」の位置付けと分析の時間の確保をする。
  - ・ P D C Aのサイクルを機能させ、評価のスムーズステップ化を図る。

### (3) 共同研究の推進で求める子ども像をつなぐ

本校では、理数教育に力を入れている。特に理科や生活科の授業を通して、「科学の好きな子どもを育てる」を研究テーマに掲げて取り組んでいる。これは、単に理科や生活科における学力を伸ばすという考えではなく、児童が科学することで育つ探究力・追究力、好奇心は、全ての学習へのエ

エネルギー(推進力)となると考えているからである。すなわち「学習へ取り組む前向きな姿勢」や「納得いくまで追究するためのこだわりをもたせること」などが大切であると考えている。そのために、

- 授業研究の推進と研修機会の充実
- 「六華プロジェクト」の実践 ～教科学習と学校生活との接続～
  - ・ 「子どもの考えを発表する活動」や、多様な表現方法を使い「子どもが子どもに教え、説明する活動」を年間を通して位置付ける。
- 研究サイクルの見直し



【調べたことを多様な方法で他学年・他学級へ紹介する活動】

・ 現職教育の研究は、他校と同様に年間を通して行っているが、研究サイクルを4月～9月までのⅠ期そして10月～3月までのⅡ期と分けて取り組んでいる。実践を通した課題をⅡ期前に明らかにし、次年度の研究の方向性を探りながら同じ子どもたちの学びの姿を対象として更に改善を加え研究を深めていこうという取組である。このシステムは研究成果を次年度の教育課程に反映させやすい。

#### (4) 個別指導の充実と学年間をつなぐ

学力は、一人一人に成立するものとの認識に立ち、学習指導上特に個別支援が必要な児童に対して、カルテを作成することにした。ねらいは、2つである。1つは、教師が設定した目標値に向けて常にその児童に対して教師が働きかける方策と変容を記録することにより、更なる取組を促すためである。まさに、医師が行う診断と治療である。もう1つは、学年がかわっても、そのカルテを引き継ぎ、成果があった取組は継続したり改善を加えたりすることができるようにするためである。

平成25年度 個別の指導カルテ			
学年	氏名	性別	学年
1	山田 太郎	男	1
2	山田 太郎	男	2
3	山田 太郎	男	3
4	山田 太郎	男	4
5	山田 太郎	男	5
6	山田 太郎	男	6
7	山田 太郎	男	7
8	山田 太郎	男	8
9	山田 太郎	男	9
10	山田 太郎	男	10
11	山田 太郎	男	11
12	山田 太郎	男	12

【学力向上個人カルテ】

#### (5) 幼保・小・中接続による校種間をつなぐ

本校では、幼保との接続を重視し、1年生は、学校周辺の保育園や幼稚園の年長組と年間数回にわたって交流活動を行っている。これは、幼保と児童の関わりを深めるだけでなく、指導する教員や保育士が、それぞれの実態を確認し、自立を促す取組に生かしていくこともねらいとしている。このことは学力の基盤という視点からも重要であると考えている。また、中学校とは、福島市の接続事業で実施している授業をそれぞれ見合う機会の確保だけでなく校長同士、自校の具体的な学力に関する課題を話し合う機会や情報交換の場を設定している。

### 3 今後の取組

子どもたちの夢や希望の実現を支える私たち教員の役割は、一人一人確実に学力を身に付けさせることである。そのため、本校ではこれからも「つなぐ」をテーマにきめ細かな指導に取り組んでいきたい。